

おかや

ゆうき

# 岡谷侑紀

高座にあがってちょいと一席！  
羽織姿が粋だねえ

「嘶家クロッチ」は展覧会で重要な役どころをおおせつかつていて。この立体作品ができるまでの工程が一目でわかるように、粘土の原形、スチロール、石膏取り、そしてFRPの完成像、さらにそれを3Dプリンターで出力したもので時系列で展示される。こんなふうに立体造形物の制作工程が見られるチャンスなんてそうそうあるもんじゃあない。

「思いを込めてクロッチを作っている」と語るのは岡谷侑紀さん。「見る人がクロッチを好きになつてほしい！」と願いながら作品に取り組んでいる。

高校時代の友人が仕事をしていたことがきっかけでラッキーワイドに入社してから6年目。「チマチマやるよりはガツガツやるほうが好き」という岡谷さん



は、細かいことは嫌いではないけれど、そればかりが続くとムズムズしてくる、らしい。ものづくりが大好きで、学生時代、空間デザインよりのプロダクトデザインを専攻した。造形の仕事をしていたら？ との問いには、「営業かな」。「美容師になりたいと思ったことも」との答え。ものづくり業界では変わり種？ なんだろうか。

今回、はじめて手がけた「キャラクター」制作は「とても楽しい！」という。とはいえ、着物のひだや、瞳の位置には思いのほか時間がかかり苦労したそうだ。そして、ついに、固い材質でできているとは思えないような、柔らかい布の質感や、今にもしゃべりだしそうなオイラの表情を作りあげてくれた。

だど語る。そして、見た人たちが「よし、嘶家クロッチ、気に入った！」と、「3Dプリンターで出力した作品の縮小サイズが欲しい！」と思わせるような作品にしようと仕上げの手に力を込める。「立体作品をこういう工程で制作している」ことを一般の人たちに知って欲しいという。ひとつの立体造形物ができあがる工程の複雑さに、オイラ、本当に驚いたよ。

「自分自身で考えながら仕事をするのが大切」と、考えている岡谷さんは、いつも新しい方法にチャレンジしている。まだ扱っていない材料もあるし、やってみなければ何が得意なのかさえわからない。ジョブローテーションをしながらさまざまな技術を身につけたいと、仕事にはとても貪欲だ。その一方で、「根本的に楽しみながら仕事をしたい」から「どうしたら仕事が楽しくなるのか？」を考え、自分なりに工夫をこらしている。

かきぬま

りょう

# 柿沼良

「制作工程展示」の作品を  
岡谷さんと共に創る

子どものころから手を動かすことが好きで、学生時代にはインテリアデザインを専攻した。今年で入社7年目となるが、この仕事をしていなかったら、「プロダクトデザイナー」。または「すぐく甘いものが好きなのでケーキ屋さんになっていたかも」と語る。家でケーキを焼くこともあるという。

「作っていく過程そのものが好き」と語る柿沼良さん。最初はクロッチ単体のシンプルなものをと考えていたが、岡谷さんとの話が盛り上がり、嘶家クロッチを作ることになった。

柿沼さんが担当するのはパソコンでのデータ作成だ。岡谷さんが手作業で作った立体像を、柿沼さんが3Dスキャンをし、サイズを縮小して3Dプリンターで出力する。さらに、撮り



ためている制作工程の写真に解説を書き添えたパネルを作るのだ。

パソコン上の操作では、実際に「もの」に触らなくても、手を動かすのと同じ感覚で造形作業ができるという柿沼さん。どちらかというと手作業が好きだけれど、パソコンの操作でも「作業」という点ではそれほど差はないと感じている。うーん、そういうものなんだ……。

ところで、オイラは作りやすい形だそう。人に近い形なのでポーズも取らせやすいのだ。とはいえ、顔の表現が難しい。たしかに、キャラクターは顔が命！だからこそ、顔の制作にはとりわけ集中して取り組むみたいという。オイラは首にスカーフをまいているので、首と胴を分割して、頭部の造形に集中でき

る。それがやりやすいそうだ。「作りやすい形」ってあるんだね。「いいものを作りたい」「前よりも早い時間で作るようになりたい」といつも考えている柿沼さんは、最初に頭の中でコミュニケーションして、実際に作りあげるところまでイメージする。一番うれしい時とは、最初にコミュニケーションしたとおりに完成した時だ。実際にはイメージのようにいかず途中で路線変更することもしばしばあるらしいから。

自分を動物に例える？ との問いには、わからないからと同僚に聞いてみてくれた。まわりからは「犬」、または「キツネ」といわれたらしい。そういわれれば……。

最後に、柿沼さんから、展覧会に足を運んでくれるみなさんへのメッセージをもらった。「みなさんは製品として完成しているものを見ることは多くても、作られていく工程を見ることはなかなかないでしょう。ですから、みなさんには工程を見て楽しんでいただきたいと思います。そして、ラッキーワイドという会社を知ってほしいです」